架空都市・渋成の日常

外伝3～オフパコ狙いのむっつりマシュちゃん～

双nari本家

DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の
購入・閲覧禁止

前書き

サークル　双 nari 本家

架空都市・渋成の日常　外伝3
～オフパコ狙いのむっつりマシュちゃん～

イラスト　カジ・マコト様

文　双 nari

2022/01/05　雪

18歳未満の購入、閲覧を固く禁じます。

本書に登場する人物は全て成人済であり、
実在の人物、団体とは一切関係ありません。

本書の無断での転載、販売、アップロードを禁じます。

かくうとし　しぶなり
架空都市・渋成とは。

ピンクのキャラサロン避難所支部と呼ばれる『なりきり掲示板』で端を発した共有世界観の名前。

一見すると普通の街であるが、エロいことに異常に寛容である。

風俗店も数多く存在するし、普通のお店でもエロいサービスがそこら中に溢れている街である。

異常すぎるが故に、『外』とはルールも常識も、ネットワークすら隔離されている都市。

男女比は3：7の女余りの街であり、性への自由さから外とは比べものにならないくらいエロい女性が多い。

そしてまた美少女・美女だらけの街でもあるのだ。

渋成に訪れた者たちはその素晴らしさを語るが、あまりにも上手い話しすぎて信じられていない部分もある。

しかし、渋成は確かにそこにあり、確かにエロを認めて存在している。

そんな架空都市・渋成はきっとどこかに存在している。

【マシュとジャンヌのエロパコタイム❤️❤️】

　山あり海あり、雪山もあるけど砂浜もある、そして何よりもエロが大いに溢れる街。
　その広さが正確には計測できない敷地面積を持つ『架空都市・渋成』
　大規模なイベント会場の一つに今日は大量の人が集まっていた。
　その人らの目当て。
　行われているのは同人誌即売会のようなイベントである。
　渋成には大きなイベント会場やドームはいくつもあり、なんだかんだで月に1～2回はその手の大規模オタクイベントが開かれている。
　基本的に渋成は平均気温クッソ高いので露出コスバッチコイである！
　その暑い中で、気温よりも熱く燃え上がるのは渋成内外から人が集まり、大いに盛り上がるオタクイベント。
　その為会場には多くの人が集まり、同人誌を売っているスペース、コスプレ会場、当たり前に様にある簡易ホテルの即オフパコブースなどなどどこもかしこも満員だった。

　そのコスプレ会場に2人組の美少女がいた。

「目線くださーい！」

「思いっきり谷間寄せて、お、おっ、すげ！」

「渋成って可愛い娘ばっかりだけど、この2人は……はぁはぁ♥」

「おっぱい、でっか……♥　めっちゃ可愛い♥」

　日差しの下、多くの汗臭く肥満体のカメコに囲まれている美少女は―――。

「えっと、目線って、こうでいいんですか？　あ、合ってます、これ？　ジャンヌ・オルタさん？」

「適当でいーのよ、そんなの♥　ほら、せっかく大きい胸しているんだし寄せて揺らして見せつけなさい♥　マシュのおっぱいですって♥　Fカップです～、ってやっときなさいって♥」

「ぁ！　ちょっと、ぁ♥　んんっ♥　び、敏感なんですからっぁ♥」

「って、うわ、これ私よりあるんじゃない？　でっか……♥」

　―――くすんだ長い白髪の美人・ジャンヌ・ダルク・オルタ。そして薄紫色のショートカットで片目を隠した眼鏡美少女のマシュだった。
　２人はかなり際どい衣装を着ている。
　ジャンヌ・ダルク・オルタ―――オルタは黒の際どいビキニ姿で長袖のショートジャケット。
　片足に赤いニーソを履いて、腰には刀を差している。
　その彼女は友人であるマシュを連れだしてこのイベントに参加しており、彼女の大きな胸を”むにゅたぷ♥”揉んではカメコたちに見せつけていく。
　マシュのおっぱいは大きくて柔らかく、まさにデカパイサイズ♥
　そのおっぱいにオルタは”むにゅ♥”っと指を食い込ませる。
　そんなことをしていれば―――。

「ぅっぉお……エロ過ぎ……ふひぃ♥」

「はぁはぁ……やば、マジで、やばい……これ♥」

「こんなエロくて可愛い女の子がいるとか渋成やっば……！」

「はぁはぁ……っ♥　んんっっぅ♥　揉み過ぎ、ですっ♥　ぁ♥」

　―――カメコたちの興奮はどこまでも上がっていく。
　集まっているのは渋成の『外』の参加者のようで、アイドル以上に可愛い美少女たちのエロコス＆堂々たるパイ揉み♥に面食らいつつも勃起していた。
　その興奮し過ぎて熱い視線の先で、手持ち看板を持ちながらおっぱいを揉まれているマシュの格好もオルタ以上に際どい♥
　ふわふわの紫色の胸あてに、スタイルの良い身体を締め付けるように紐が走るかなりデンジャラスでビーストな格好♥
　そんな際どくエロい姿をしているのは、共に美人でともにスタイル抜群の２人。

　その2人は汗臭いカメコたちに囲まれて、オルタは楽しそうに♥　マシュは恥ずかしそうにポーズをしていく。

「えっとぉ、ふひぃ♥　お尻突き出してくださーい♥」

　脂っこいキモオタカメコくんがオルタにそう指示を出せば彼女は―――。

「お尻？　もう……さっきからそっちばっかり撮ってない？　ほら……♥　しっかり撮りなさいよ？　私のムチムチの……デカケツ♥」

　”ふりふり♥”

　―――ビキニの食い込んだお尻を突き出して左右に揺らす♥
　あまりにもエロいアピールに数人のカメコは前かがみになっていく。
　そのリアクションをオルタは実に楽しそうに見つめては次のリクエストに応える。

「ほらぁ、マシュちゃん、だっけ……♥　おっぱいアピールしながら看板見せて♥　何書いてあるか読んでよぉ♥」

　マシュの方ではこんなリクエスト。
　シャッター音が響く度に腰をくねらせるマシュへ鼻息荒くカメコが指示を出した。
　それを受けて、マシュは頬を赤らめながらデカパイを”たゅっぽ♥”と揺らしつつ、手にした看板を向けて片腕でおっぱいを”むぎゅ♥”っと寄せた。

「え、えっと、こ、こうですか？　っ……そ、それで……♥　お、オフパコ、希望、です♥　今なら、その、げ、現金キャッシュバックも、します、から……っぁ♥」

　デカパイ見せつけながらのオフパコ希望発言♥
　そのエロい言葉とアピールにまたシャッター音が拍手のように降り注いでいく。
　美少女からの「オフパコ希望♥」それだけでも興奮もんなのに、

「現金キャッシュバッグ♥」、つまり女の子がお金を払うというありえなさ♥
　しかしここは渋成！
　『外』ならいざ知らず―――。

　『渋成女子は全員趣味は違えどスケベ』

　『女性の方が多いので女余り気味』

　『射精回数が限られているので男の方が貴重』

　―――こんな状況なので逆援交はパンにレタスとハムを挟んで食べるくらいにはポピュラーなのだ！　すごいね渋成！
　そんな訳でマシュは看板をアピールしながら―――。

「っぁ♥　あの、えっち、してもイイって人いたら……♥　その、撮影後に……♥　お声掛け下さい♥」

　―――なんて控えめに、だけどドスケベにアピールしていく。
　腰をくねらせて、熱い息を「っぁ……ん♥」なんて漏らしてのオフパコおねだり。
　そんなエロい姿を見せていく美少女2人。
　2人の目線は時折スッと細められていき―――。

「……♥（ぉ♥　あの手前のカメコ……結構いいチンポしてそう……かしらね？　しゃぶりがいありそうね♥）」

「……♥（あ……覗き込もうと下から見てくる人……好きかも、です♥）」

　―――撮影されながらも周囲のカメコの品定めをしていたりする。
　オルタはガニ股のポーズを要求されるとわざとカメコに一歩二歩近づいてからしゃがみこんで―――。

「ほら……♥　これでいいんでしょ？　好きに撮りなさいよ♥　ふふ♥」

　―――片手を口元で動かしてのフェラ仕草♥
　舌も伸ばして”れろれろ♥”させてのアピール♥
　水着もおまんこに食い込ませてのシャッターチャンスを作れば美少女のエロいその姿にカメコたちは興奮しまくっていく。
　どこか気弱そうな雰囲気を見せるマシュでさえも、カメコに「お尻を突き出して下さい！」と言われた際には―――。

「は、はい……これでいいでしょうか……♥（あ、見てる……すっごく見てる……♥　あの人……いい、かも♥）」

　―――むっちりしたお尻をわざと”ふりふり♥”揺らして相手を挑発していく。
　お尻を揺らすだけでは足りなくなったのか、興奮したマシュは両手でお尻を左右に広げて見せたりまでしていってしまう。
　そんな風に興奮して、子宮を”キュンキュン♥”させながらマシ

ュもオルタも舌なめずりをしていくのだった。
　キモオタカメコたちのエロい、ケダモノじみた視線を全身に浴びながら、２人は―――。

「「せーの♥　……♥　オフパコ待ってまーっす♥」」

　―――ダブルで横ピースを決めていく♥

　―――。

　――――――――。

　しかし、その場では結局良い相手は見つからずに２人は会場内を散策していた。
　見苦しいくらいに粘ったりしたのだが、カメコたちは近くで始まった渋成の『外』でも有名なアイドルグループのコスプレ撮影会に流されて行ってしまったのだ。

「はぁあ……もう……。ん～……どっかにイイチンポいないかしらね？」

「ち、チンポって……ジャンヌ・オルタさんお下品ですよ？　もう少し、その、つ、慎みを……」

「はぁ？　なに言ってる訳？　あなただって考えていることは一緒でしょ？　渋成女子の考えていることなんて8割、いいえ、9割チンポよチンポ♥」

「……の、ノーコメント、です」

　男女比6：4か7：3とも言われて、女余りが激しい渋成。
　その上で繰り返すが渋成女子はタイプ、性格の差はあってもスケベ率100％。
　セックスをしたくても男の数には限りがある。
　更には射精回数の限界もある、だからどうしても女の方が性欲を持て余すのだ。

「ね……マシュ。最後にしたのって……あなた、いつ？」

「っぇ？　最期は……えっと、せ、先週、おじさま風俗で……えっと……はい……」

「ふぅん、いいわね。私は5日前ね。セフレから連絡あって、二回♥」

「ぇ！？　せ、セフレ、いるんですか……羨ましい……っ……！　そっちの方がイイじゃないですか！」

「ふふふん♥　どやっ♥」

　セフレと言う単語を聞いてさっきまでは下品だなんだと言っていたマシュは露骨に反応し羨望と言うか嫉妬混じりの視線を向けていく。
　それにジャンヌは少しだけ自慢げな顔をして見せていた。
　そんな下品と言うか、もはや開けっぴろげな会話をしていく美少女2人。

　だけど、会場を男目的で歩くコスプレ美人たちも大概似たような会話をしているのだ。
　現にそこら中で異常なほどレベルの高い美女美少女たちが――。

「うー、そろそろおまんこ限界なんだけど……」

「オフパコ無理めだし、風俗埋まる前に諦めて移動する？」

「あああ！　さっきのカメコさん他のレイヤーのお持ち帰りされてる！」

「うわ、もうオフパコ報告始めてるレイヤーいるし……くそぅ、いいなー」

　―――そんな話をしまくっているのだ。
　コスプレも楽しみたいけど、イベントの後のオフパコも当然楽しみなのが渋成女子。
　その欲望と悲哀に満ちた声を聴きながらマシュとジャンヌは

「早く相手を見つけねば！」と焦っていた。

「……」

「……」

　焦りから無言。
　しかし、視線は油断なく男を見つけようと必死になっていく。
　２人はなるべく、というかもはや無意識に腰をくねらせるように歩いて、それぞれ大き目のおっぱいを”たっぷん♥”と揺らしていく。
　そうやって、どうにか男を探しているのだが、1人でフラフラ歩いている男などおらず、ほとんどが先に手をつけられている状況だった。

「……1人の男の人、いないですね……」

「ぅ～ん……時間的にそろそろ厳しい、かも知れないわね」

正直このイベントに期待してきた2人。
さっきの会話の通りにマシュは今日まで7日セックスなし、オルタは5日と渋成女子としてはかなりギリギリのライン、性欲爆発しそうなタイミングだった。
その上で、汗臭いカメコに囲まれての撮影で興奮している2人のむっちりした太ももにはマン汁が垂れてしまっていた。

「やば、ちょっと濡れ方が酷い、かも……♥」

「ぅ……オルタさんも、ですか？　……ブース借りてオナニー。します？」

「ぇ～……ここに来て、それは……ん～……」

2人がチラッと見るのは会場に設けられた『オフパコブース』
狭く小さなプレハブ小屋がいくつも連なって設置されているそこ。
そのまんま、会場でムラムラしたらそこでエッチしちゃえ！っという渋成らしいサービスである。

　基本はパコ用なのだけど、休憩などに使う人もいるし当然――。

「それに2人でオナニーっていうのもアレじゃない？」

「私は……その、変なクセ無いから平気ですけど……ジャンヌさんはイイんですか？」

「はぁ！？　それじゃあ私が変なオナニーしてるみたいじゃない！」

「い、いえ、そーゆーつもりじゃ……」

　―――オナニーする為に使う人もいるのだ。
　しかし、マシュとオルタはここにセックスをする為に来て居る！
　と、言うかその為に衣装も作ったし、その費用も人から借りているレベル！
　そこまで一発もやれずにオナニーして帰ったなんてなれば多

分2人は泣く。

「……せめて、バイブかなにかで、レズる？」

「っぇ？　っぁ……うーん……」

　しかしながら発情しきっている2人はオナニーにするか女同士でやるかとまで考えていた。
　ちなみに、同じ考えのレイヤーは他にもいるし、オフパコブース内で既におっぱじめているレイヤーもいる状態だった。
　そんな、メスの匂い垂れ流しである種極限状態の2人に――――。

「ね、ねぇ、そこの2人、さぁ♥　んひひ、さっきからうろうろしてるけど、もしかして……オフパコ狙い、なのかなぁ？」

「「ぇ？」」

―――声がかけられた。
咄嗟に2人はおっぱいを”たゆっ♥”と揺らして振り向くとそこにいるのは太ったキモオタくん。
肥満体で、ズボンのベルトの上に腹肉を乗せたような彼はニヤニヤしながらオルタとマシュに声をかけた。
この彼は渋成住みではない『外』の住民だけれど、イベントがある度に遊びに来ている渋成常連のキモオタくんだった。
だからこそ、この街のことも知っており、イベントを楽しんだついでに女の子も楽しもうと決めていたのだ。
エロい美少女だからの街を堪能する気満タンな彼は股間を膨らませてて目の前の美少女コンビに舌なめずりをした。

「んひひ……♥　もし良かったらさぁ、あっちで……どうかなぁ？」

過去にエッチしてきた誰よりも美人な2人を前に股間を膨らませるキモオタ。
鼻息荒く指さすのはオフパコブース♥
そこに誘われれば―――。

「「……♥」」

　―――2人のメスは興奮しきった顔で同時に舌なめずりをしていくのだった。

　―――。

　――――――――。

　イベント会場内に設置された3畳程度の広さの個室。
　床は柔らかく、肌を傷つけない素材のマットで出来ていて、完全に『やるだけ』のそこ。
　壁には一応ハンガーがフックにかけられていて、荷物を置くための棚が一つある。
　そこにキモオタくんとマシュ、オルタは荷物をおけばもう準備は終わっているわけで―――。

「れろぉ♥　ちゅ♥　早く、脱ぎなさいよ♥　ちゅ♥　はぁあ♥　それとも脱がして欲しいのかしら？」

「ちゅ♥　んん♥　汗の味、すっごくしょっぱいです……れろれろぉ♥」

「っぉ♥　おほっぉ♥　積極的過ぎぃ♥」

　―――コスプレのまま2人は左右からキモオタくんの肥満体に密着しての顔舐め＆キス♥
　”ぼにゅっ♥”とデカパイを押し付ける様に押し当てつつ、2人は発情しきった甘い顔でキモオタを誘惑しまくる。
　マシュの手はキモオタの股間をズボン越しに撫でまわして、オルタはそのデブ腹を撫でていく。
　気づけば腰を”へこへこ♥”させている2人は何度も何度も汗ばんだキモオタの頬を舐めていく。
　男の味。雄の味に興奮を更に高めていく2人からはメスの香りが立ち込める。

「はぁあ♥　れろぉ♥　どっちからに、する、のよ？　はぁあ♥　はぁあ♥　ち、ちなみに、私、おっぱい90超えてるから♥」

「きゅ、きゅーじゅー……っぉお♥」

　興奮し発情しきったオルタはその自慢サイズのデカパイを”むぎゅ♥”っと押し当てながら誘惑して、最初の一発目を狙っていく。
　しかし、それをマシュはただただ見ているハズもなく―――。

　”ぼにゅん♥”

「わ、私だって90cm以上ありますからね？　それにっぁ……わ、私、オルタさんより年下、ですから♥　お肌だってピッチピチですよ？」

「っぉ、ぉおぉ♥　ぴ、ピッチピチ……♥」

　―――反対側から誘惑の攻めをしていく♥

　２人で仲良く男あさりに来たマシュとオルタではあるけれど、この手の場合は激しい争いになってしまうのも渋成では基本だ。
　譲り合うというのは満たされた状態で初めて行われるものである。
　植えたデカパイコスプレ渋成美女２人にそんな余裕は０である。

「ほら、どっちからにするの？　ねぇ……♥　はぁあ♥　れろぉ♥」

「私、から、お願いします、ちゅ♥　絶対、絶対気持ち良く、しますから♥」

　部屋に入った時点で余裕なんてなかった２人は更に興奮し、太ももにマン汁を垂らしまくっていく。
　濃厚過ぎるメスの匂いを漏らす２人に挟み込まれたキモオタくんのチンポは激しく勃起しており、ズボンにカウパー染みを浮かべてしまっていた。
　どっちを選んでも最高にエロい美少女♥

　しかも、両方味わえるのだ。
　その想像だけで射精しそうになりながらキモオタくんは――――。

「それじゃあ、最初は、マシュちゃん、だっけぇ？　マシュちゃんにおちんぽあげるよぉ♥」

「っ♥　ぁ、ありがとうございますっ♥　やった♥」

　―――マシュを選んだ。
　それに彼女は可愛らしくピョンと跳ねて喜びを表現し、オルタは本気で落ち込んでいく。
　２人が準備をしていく間も、ずっと「早くすませなさいよ！」とイライラとムラムラを隠しきれずにいるようだった。
　そんなオルタの視線など気にしないでマシュは四つん這いになってデンジャラスビーストなコスの股間部分をずらして、濡れまくりのおまんこを晒した。

「はぁはぁあ♥　お願い、します♥　もう、おまんこ我慢できなく

て……♥　っぁ♥　早く、おちんぽ、おちんちん♥　思いっきりズコズコしてくだしゃぃ♥♥」

「……はぁはあぁ……えっろ♥」

　見た目は控えめ、大人しそうな美少女なのに積極的なエロアピール♥
　”むわっ♥”と湯気出そうなくらいに濡れてホカホカのおまんこを前にキモオタくんも我慢の限界な模様。
　汗で濡れて張り付いた服を脱ぎ、肥満体を晒せばそれを見ていたオルタも生唾を飲んで行く。

「それじゃぁ、はぁはぁ……♥　ぃ、挿れてあげるから、ねぇ♥」

　鼻息荒くしつつコンドームをチンポに装着。
　やや太めの16センチほどのチンポ。
　興奮にビクビクしっぱなしのそのチンポをマシュのおまんこに押し当てた。

「っぁ♥　っぅ……♥　はぁあ♥　おちんぽ♥　っぁ♥　っぉ゛♥」

　まだ挿入していないのに押し当てられただけで声を漏らしてしまうマシュ。
　腰を震わせてお尻を振っている彼女のおまんこに、キモオタくんはゆっくりと挿入していき―――。

「っぉ♥　っぉお♥　マシュちゃんまんこ、っぉ♥　すご♥」

「っぁぁぁあ～～～っ♥　くひっぃ♥　ぃいいいぃ゛♥　我慢してたから、す、すごひぃ♥」

　―――2人して声をあげていく。
　挿入したキモオタくんはマシュのみっちり系の名器おまんこの気持ち良さに腰を震わせ、マシュは久しぶりのチンポに挿入だけで軽くイってしまっている。
　床に突っ伏したままヨダレを垂らして声を漏らすマシュ。
　その彼女のくびれた腰をがっしりと掴んでキモオタくんは腰を振っていく。

”ずっぷ♥　ぬぷ♥　ぬっぽ♥”

「はぉおお゛♥　きも、ちぃ♥　っぁ♥　気持ち良すぎ、ましゅぅう♥　んぁぁあ♥」

　濡れまくりのまんこは一回”どちゅっ♥”とピストンされる度にマン汁が漏れ出て床に垂れいく。

「ぉおぉお♥　マシュちゃんのまんこ、っぉ、気持ち良すぎ、だよぉ……っぉ♥」

「ほっぉ゛♥　おぉおお♥　すごっ♥　ぉひぃい♥　ひっぃ♥」

「ぅっくぅ♥　渋成女子ってなんでこんなに美人でエロいんだろう、ねぇ♥　はぁはぁ！　ふひぃ！」

　全裸のキモオタくんは肥満体を揺らしてマシュのおまんこを貪っていく。
　たるんだ腹を、脂肪満載の身体を揺らして腰を振り、お漏らし

でもしたかのように濡れまくりのまんこを楽しんでいく。

”じゅっぷじゅぽっ♥”

「ひゅごひぃっ♥　チンポぉ♥　おまんこ、もっと、もっとぉ♥　ぉ゛♥　奥、ゴンゴンしへぇ♥　ぉ♥」

激しくピストンされる度に、大人しそうな見た目を裏切る声をあげるマシュ。
ピストンに合わせておっぱいも”たぷたぷ♥”揺らしていき、その激しさに胸がこぼれそうになっていく。
その2人のセックスをオルタは部屋の隅で立ったまま見ていた。
正確にはややガニ股に足を開いて片手でおまんこを”くちゅくちゅ♥”弄りながら―――。

「は……早くしなさいよ……♥　ん、ま、マシュ、もういいでしょ？」

―――早く自分の番にと急かしていく。
キモオタくんの身体もチンポも1つな以上順番は順番だ。
それにオルタは急かすがマシュは―――。

「まだ、だめぇ♥　もっと、んんっ♥　このチンポでおまんこの奥まで♥　ぁ♥　ねっちり使い込んで、ぁ♥　んんっ♥」

―――まだまだ順番を交代する気はないと宣言。
その発言にオルタはおまんこの人差し指を入れてオナニーしながら「マシュ？！」と声をあげていた。
その声を聞きながらキモオタくんは「このマシュちゃんも超かわいいけどぉ、オルタちゃんも美人で早くおまんこ味見したいなぁ♥」などと考えていた。
マシュのおまんこの次はオルタ、美人まんこを連続で味見だぃ！　なんて下卑たことを考えていたキモオタくんだが―――。

「んっぁ♥　まだ、だめですよぅ……♥　ん、ほら、ぁ♥　ん♥」

「ぉ、ぉおぉおっ♥」

―――腰を引いてチンポを抜こうとした瞬間！　マシュは自分からお尻をつきだしてチンポを深く咥えこんだ。
　それだけじゃなくておまんこを小刻みに締め付けながらお尻をくねらせてのご奉仕まんこっぷりを見せつける。

「私のおまんこ……しっかり味わってから……ですよ♥　具体的には4発くらいは……♥」

　目を細めてエロく舌なめずりをするマシュは貪欲におねだりをしていく。
　オルタは「ちょっとマシュ！？　ふざけないで貰えます！？私オナニーしてるだけなんだけど？！」と怒るが、キモオタくんは今はマシュに夢中になってしまっていた。
　くびれた腰を掴むと―――。

「ふひひぃ、それじゃあ……念入りにおまんこ、可愛がってあげるからねぇ♥」

「んっぁ♥　はぁい♥　期待しちゃいますっ♥　”ずっぷ♥”　んっぁあああ♥」

　―――激しく腰を振っていった。
　おまんこの奥を刺激される快感に声を漏らしまくるマシュ。

「好き、っぁ♥　この、っぉ゛♥　おちんぽ、好き、ですぅ♥　っぁ♥　もっと、おまんこ、可愛がって、っぁ♥　っぁぁあ♥」

　デカパイを”ぶるるっ♥　たぷ♥”と揺らし、気持ち良さにもうだらしない顔をしてしまっていた。
　マシュのおまんこ。ピストンする度に締め付けられるおまんこの気持ち良さについにはキモオタくんも限界はくる。

「はぁはぁあ……ぉお、おふぅ♥　ぉ、も、もう……っぉ！」

「ぁっ♥　おちんぽ、ビクビクしてっぁ♥　っぁぁあ♥」

　締め付けてくるおまんこの気持ち良さにまけたように”びゅ

るる！”とゴムの中に射精していくキモオタくん。
　射精の刺激。コンドーム越しのそれにマシュは背中を丸める様にして感じて、痙攣してしまっていた。

「出て、っぁ♥　っぁ♥　も、っぁ♥　イク♥　っぁあ♥　ダメ♥　イク♥　っぁっぁあ♥　イクっぅ♥　～～～～っ♥」

「美少女に、っぁ♥　思いっきり射精、や、やば、っぉおおお……♥」

　絶頂する２人の震えはある種シンクロしていく。
　キモオタくんはコンドームの中に大量の精液を漏らし、やや夢見心地な顔を見せる。
　それに対してマシュはイキ痙攣を続けて、おまんこを締め付けては荒い息を漏らしていた。
　そんな風に快感に声を漏らす２人はその余韻にしばらく浸っていた。
　いたんだけど―――。

「マシュっ！　もうイイでしょ？　次は私の番ってことで！？　これ以上は流石に看過できないわ！」

　―――我慢の限界を迎えたオルタがそこに割り込んだ。
　指をマン汁で濡らした彼女は真っ赤な顔でキモオタくんに横から抱き着いてそのままキス♥

「んっぉ？　ぶちゅっ♥」

「ちゅ♥　れろ♥　ちゅじゅるる♥　次っぁ、私の番よ？　れる♥　ほら、さっさと準備、しなさい♥　ちゅじゅるる♥」

　キスをしながらの激しいおねだり♥
　それにキモオタくんは射精したばかりで、まだマシュのおまんこの中に挿入されたままのチンポを震わせていくのだった♥
　３人のオフパコはまだまだ終わりそうにはない模様♥

【続きは本編で！】